

ナショナリズムの再生産の機制とその解除の可能性

—Benedict Andersonにおける「歴史の天使」—

The Reproduction of Nationalism:
The Angel of History in Benedict Anderson's Work

新倉貴仁* Takahito Niikura

0. 問題の所在と目的—ナショナリズムの再生産

本稿の目的は、ナショナリズム研究において理論上の陥穀とみなされる「ナショナリズムの再生産」のメカニズムを分析し、これを乗り越える視座を構築することである。

例えばRogers Brubakerは、「理論の上でネーションを現実的なものとして取り扱うことによって、実践の上でこのネーションを現実的なものとして取り扱うことを、意図せず、『再生産 reproducing』したり、『強化reinforcing』したりすることを避けなければならない」(Brubaker, 1996:16) と警告する。ネーションを本質的に扱うのではなく、Hobsbawmのようにナショナリズムがネーションを構築するという視座をとるのであれば、ここでBrubakerが指摘する研究者の実践は、それ自体がナショナリズムに属するといえる (Hobsbawm, 1990=2001)。

この陥穀に対し、本稿が採用する方法は理論

的手手続きの精緻化ではない。本稿は、この陥穀をナショナリズムの理論的考察のための出発点として据える。すなわち、「ナショナリズムの再生産」という事態を、ナショナリズムという現象に内在する構造的特質が顕在化する臨界として捉える。

従来のナショナリズム研究は、ナショナリズムを社会現象として、説明される対象に位置づけ、その客観的記述を目指してきた。しかし、「ナショナリズムの再生産」が構造的特質としてナショナリズムそのものに組み込まれているのであれば、記述が社会へと再帰していく局面までを射程に入れた理論的視座を考慮する必要がある。本稿が目指すのは、ナショナリズムの観察および記述という局面を組み込んだ理論的視座の構築である。

*東京大学大学院学際情報学府博士課程

キーワード：ナショナリズムの再生産、ナショナリズムの言説、歴史の天使、時間性

1. ナショナリズムの同定からナショナリズムの再生産へ

例えば、ユーゴスラビア紛争は、セルビアやクロアチアのナショナリズムの争いとして説明される。だが、このような記述は、その現象を「ナショナリズムである」と同定することから始まる。これは、解釈によって、ナショナリズムという意味を読み込むことであり、結果としてナショナリズムが作用しているという事実を承認する。解釈される対象と解釈する観察者が、ナショナリズムという認識枠組みの中に位置し、ナショナリズムと目される現象を作り出すのである。

このような例は、ユーゴスラビアに限るもの

ではない。現在の日本のメディア空間において、ナショナリズムについての言論が頻繁に出現する。だが、「なぜその現象をナショナリズムとして同定することができるのか」という問い合わせもたないのであれば、その言論の意図がいかなるものであれ、語られることによってナショナリズムは拡散していく。「ナショナリズムの再生産」は、解釈においてその事象にナショナルな意味を読み込んでいることによって生じる。本節では、この「ナショナリズムの再生産」という問題が、ナショナリズム研究においていかなる理論的意義を持つのかを検討する。

1.1 観察における再生産

では、この「ナショナリズムの再生産」とは理論的にいかなる問題なのか。

内田隆三は、「ナショナリズムやネーションを構築主義的な視点から批判する議論では、しばしば批判や脱構築の対象としてのネーションを逆に実体化し、その時代や社会の経験をナショナリズムという視点から機能主義的に再構成してしまいがちである」と指摘する（内田, 2001 b:4）。これは、ナショナリズムという現象の成立が、対象に由来するのではなく、観察する研究者の解釈の枠組みに由来するものであることを指摘している。

また、吉野耕作はそれを担う行為者の属性や位置に応じて異なるナショナリズムが展開して

いるにもかかわらず、社会の「全体」を想定してナショナリズムが語られることに疑問を呈する。「『社会全体』のナショナリズムの存在を想定する研究者の見方は、それ自体『日本人全体』をナショナルな『想像の共同体』と見るナショナリズムの思考法と親和的であると言えないだろうか」（吉野, 1997:199）。この「全体」は、研究者が俯瞰的なまなざしをとることによって生じる。この吉野の指摘もまた、観察者の位置の問題としている。

以上の指摘から導き出されるのは、「ナショナリズムの再生産」が、解釈する図式を導入し、意味を付与していくという観察の水準に関連しているということである。

1.2 記述における再生産

研究者が分析に用いる解釈の枠組みが「ナショ

ナリズムの再生産」をもたらすことは、ナショ

ナリズムの理論研究に重大な困難を突きつける。なぜなら、研究の対象をナショナリズムと同定するという手続きにおいて、すでに「再生産」の問題が生じるからである。

ゆえに、従来のナショナリズム研究は、ナショナリズムという現象の定義の困難に悩まされてきた。第一に問題となるのが、定義が同語反復に陥りやすいことである。例えば、Hobsbawmはネーションを客観的にも主観的にも定義することはできないとし、ナショナリズムがネーションを生み出すとする (Hobsbawm, 1990=2001: 10-11)。だが一方で、Hobsbawmは、ナショナリズムの定義をGellnerの有名な定義に求めている。すなわち、「政治的単位と民族的単位が一致しなければならないとする原則」である。しかしこの定義は、Gellnerの原書では “Nationalism is primarily a political principle, which holds that the political and the national unit should be congruent” とされている (Gellner, 1983:1)。つまり、これはネーションを生み出すとされるナショナリズムが “national” という語によって定義されている点で、循環定義になっている。Hobsbawmのナショナリズム論は、この定義の循環の中で成立している。

第二に、客観的な基準からナショナリズムの

1.3 言説としてのナショナリズム

このような定義の困難さという問題を回避するように思われるが、ナショナリズムを言説としてとらえていくという視座である (Calhoun, 1997、Özkilimli, 2000)。この視座において、ナショナリズムは知の様式と捉えられ、読

定義を試みても、そこから恣意性を排除することが困難である。Anthony Smith (1991=1998) や吉野 (1997) は、ナショナリズムの共通項を拾いながら、暫定的な定義を試みる。吉野によれば、それは、「ナショナリズムとは、『我々』は他者とは異なる独自な歴史的、文化的特徴を持つ独自の共同体であるという集合的な信仰、さらにはそうした独自感と信仰を自治的な国家の枠組みの中で実現、推進する意思、感情、活動の総称である」(吉野, 1997:10-11) とされる。しかし、この定義において、どの特徴を優先し、あるいは従属的なものとするかは、観察者の恣意に委ねられる。吉野が「総称」としているように、この定義は、複数の要素からなる構成体に暫定的な名前を与えたものである。内容や機能によって類型化することも可能であるが、これは善い／悪い、解放的／排他的など、「ナショナリズム概念は絶えず分岐する、という同一のジレンマのまわりを堂々めぐり」する結果になりかねない (Balibar and Wallevstein, 1990=1995:70)。

以上の、ナショナリズムという現象の定義の困難は、「ナショナリズムの再生産」が生じる可能性がすでにその理論的記述に組み込まれていることを示唆している。

むこと、見ること、書くことを条件づける言説編成体とされる⁽¹⁾。

この視座が認識利得を持つのは、次のようなナショナリズムの把握を可能にするからである。すなわち、ナショナリズムとは、「心情の表現

手段として『民族』や『国家』という言葉が採用された状況」とするものである。ゆえに、ナショナリズムは文脈に応じて、重層化、複数化する。そして、「そうした個々の文脈を無視して、一括して『ナショナリズム』という総称を与える、それを肯定したり否定したりしても、どれほど意味があるのか疑問である」とされる（小熊, 2002:826）。ナショナリズムは語られることにおいて観察することが可能になり、また、文脈に応じて意味を付与されることにおいて定義を確定せずに記述することが可能になる。さらには、現象が語りによって構築されることを示唆するため、「ナショナリズムの再生産」の機制を説明する。

しかし、語られることによって成立するという性格は、すでにGiddensが社会学的知識につ

いて指摘するものである。「社会学的知識は、社会生活の世界にらせん状に入りし、社会学的知識のみならず社会生活の世界をも、そうした再参入の過程に不可欠な要素として再構築していく」（Giddens, 1990=1993:29）。この点において、「ナショナリズム」は、「女性」や「人種」などの他の社会学的概念と性格を異なるものではない。これらの概念もまた、厳密な語の定義を要しないまま、流通し、強力な説明機能を期待される。もし他の社会学的概念と同様の機能として分析可能ならば、あえてナショナリズムだけを取りあげて論じる必要はない。言説としてナショナリズムを捉える視座は、強力な説明力を持つようにみえるが、ナショナリズムという対象の固有性を十分には説明しない。

2. ナショナリズムの時間性

「ナショナリズムの再生産」の問題は、観察と記述の問題を先鋭化させる。従来のナショナリズム理論が定義の困難に悩まされてきたことは、ナショナリズムの観察と記述の問題に直面していたと考えることができる。ナショナリズムを「言説」として捉える視座は、観察の水準においてはナショナリズムを「語られるもの」に限定し、記述の水準においてはナショナリズムの定義を回避する。だが、このような手続き

は、他の社会現象に対しても適用可能であり、ナショナリズムの構造的特質を解明するものではない。本稿は、この手続きだけでは、ナショナリズムという現象を説明することはできず、また「ナショナリズムの再生産」の問題を解明することはできないと考える。本節では、その不足を補うものとして、「時間」の問題をとりあげていく。

2.1 ナショナリズムと近代

ナショナリズムの問題が他の社会現象に還元されてしまうという問題は、Giddensの立論に由来する。Giddens自身が明言するように、彼

の社会学が対象とする「社会」とは、「国民国家」と重なる。Giddensが採用する方法はこの「国民国家」に固有な特質を把握することを通

じて、近代社会の本質を解明するというものである (Giddens, 1990=1993:27)。

しかし、これは理論的限界をもたらす。なぜなら、近代の特徴とされるものが「国民国家」の特徴から導きだされるため、両者を区別することは不可能になる。それゆえ、ギデンズの立論では、ナショナリズムと近代は同語反復的な関係におかれる。ナショナリズムは近代の社会現象の一つという位置づけにはおさまるものではなく、Giddensのいう社会自体がすでにナショナリズムという特質によって特徴づけられている。

ここにおいて我々は再び、ナショナリズムの臨界に達する。それはナショナリズムという現象の固有性を明示することができないということではない。モダニティ、あるいは社会という現象の記述が、常に、あるいは、すでに、ナショ

ナリズムによって条件づけられているということである。

だが、ナショナリズムと近代が切り離しがたく重なっているということは、逆説的にナショナリズムの理論的考察に道を開くものである。ナショナリズムが近代と切り離せないということは、ナショナリズムの解明と近代の解明が並行することを意味する。ナショナリズム研究は近代を解明する鍵を提供するし、近代の考察はナショナリズムの解明に鍵を提供する。それゆえ、Giddensの近代についての考察が時間をめぐって展開されることに注目すべきである⁽²⁾。近代という問題への接近の道筋が、時間の考察にあるのであれば、ナショナリズムの核心を解明する手がかりもまた、この時間の考察にあるのではないか。

2.2 ナショナリズムと時間

時間という局面に注目することで、言説としてナショナリズムを捉える視座を批判的に補うことができる⁽³⁾。ナショナリズムが「女性」や「人種」といった他の社会的カテゴリーと異なるのは、それが時間に関わるものだからである。ナショナリズムが他の社会的現象と同様に扱えないのは、歴史や土地への愛着、死者やまだ生まれざる者といった時間に関する問題を含むからである⁽⁴⁾。それゆえ、「ナショナリズムの再生産」は社会的現象一般の特徴として還元するのではなく、時間という点から考察する必要がある。

ヨネヤマ・リサはこの時間の観点から、「ナショナリズムの再生産」の考察を試みている。

ヨネヤマは戦後日本のナショナリズムを批判する言説を検討する文脈で、「戦後日本の反・忘却のうごきが、ある特定のナショナリズムを批判するいっぽうで、ナショナルな言説を同時に再生産してきたこともまた、否定できない」(ヨネヤマ, 1998:242) と指摘する。ヨネヤマは、この「ナショナリズムの再生産」の機制を歴史記述に求める。過去－現在－未来という、単線的な歴史記述において、「日本人の過去を、日本人が、日本の未来のために思い出す」ことが無自覚になされ、「想起の主体と対象と目的とのあいだに、矛盾なく同一性が保たれて」しまうとされる (ヨネヤマ, 1998:242-3)。

ここでヨネヤマが問題にする歴史記述とは、

本稿の用語系においては、時間の観察と記述をめぐる問題である。ナショナリズムを表現するナショナリストと、ナショナリズムの観察者としての批判者が、同一の観察と記述の様式をと

2.3 「ナショナリズムの再生産」の時間性

この時間をめぐる観察と記述の様式という観点から、Benedict Andersonのナショナリズム論を再構成することができる。Andersonは、ナショナリズムと時間性の問題をその考察の中心においている。

観察と記述という問題に関して、『想像の共同体』の増補版におけるAndersonの一見奇妙な問いかけが手がかりとなる。それは、人間の細胞が約七年間で全て変化するにも限らず、何故同一の人物であるといえるのかというものである。Andersonのここで企図は、外見上はまったく異なる赤子が自分と同一の人物であったという「記憶」の欠落から「物語」による補填の必要性が生じ、アイデンティティの形成の問題が成立したことを強調することである。連續性の感覚は、自伝や伝記といった物語の形式と親和性を持ち、さらには写真という複製技術によって支えられる。

この連續性の感覚を、Andersonは「均質で空虚な時間」という概念で説明している。「均質で空虚な時間」とは、「メシア的時間」と対

るとき、「ナショナリズムの再生産」は生じる。そしてそのような同一の観察と記述の様式とは、過去－現在－未来という単線的な時間感覚の中に位置している。

比され、近代とそれ以前の時代との間にある断層を示すものである。そして、「想像の共同体」とは、「均質で空虚な時間」において出現するものと位置づけられている。この「均質で空虚な時間」において連續性の感覚が生じるのであり、それは対象を連續的なものとする観察の形式の出現をさす。もし社会を個人（あるいは関係性）の総体であると定義するのであれば、要素自体は時間の推移のなかで無限に変化する。にもかかわらず、時点Aにおける社会と時点Bにおける社会が同一のものであると観察されるのである。

Andersonがナショナリズムを「均質で空虚な時間」の産物であるとするとき、ナショナリズムは社会を連續的なものとみなす観察の形式と同一視される。この点において、連續的な時間性が近代およびナショナリズムの特徴となる。ヨネヤマが指摘するのは、「ナショナリズムの再生産」が、このような連續的な時間性の中で観察と記述が作動するゆえに生じるということである。

3. 「歴史の天使」

以上の議論において、ナショナリズムが近代という問題と複雑に絡まり合うこと、また、それゆえにナショナリズムという現象が時間との

関わりにおいて固有であることを確認した。さらに、「ナショナリズムの再生産」は、連續的なものとして社会を観察することを可能にする

のような近代の時間性において生じる。本節では、この「ナショナリズムの再生産」を解除する手がかりを、Andersonの議論における「歴史の

天使」の形象に見出し、観察と記述という局面を組み込んだナショナリズムの理論を構築する道を開いていく。

3.1 方法論としての「歴史の天使」—観察と記述

「歴史の天使」とは、Benjaminの『歴史の概念について』に登場する形象である。同書から次の二節が引用され、『想像の共同体』の初版の終章に配置されている。

彼の顔は過去に向けられている。我々がひとつの事件の連鎖と知覚するところで、彼は、ただひとつの破局が、残骸の上に、また残骸を積み上げて、それを彼の足下に投げつけるのを見る。天使は踏みとどまって、死者を甦らせ、破壊されたものを繕いたいと思う。しかし、天国から嵐が吹いてくる。その嵐は、彼の翼をわしづかみにし、天使はもう翼を閉じることができない。嵐は否応なしに彼が背を向けている未来へと彼を押し進ませ、その一方、彼の前の残骸の山は空に届くばかりに増大していく。この嵐が、我々の言う進歩である(Benjamin, 1940=1995:653)

また、「史的唯物論者は、歴史を逆なですることを自分の使命とみなす」という一文がエピグラフとして引用されている。あまり論じられ

ないことだが、『想像の共同体』とは、その構造においてBenjaminの歴史哲学によって貫かれている書物なのである⁽⁵⁾。

この「歴史の天使」とは、過去－現在－未来という進歩主義的な歴史観の批判、解体をめざすものとされる。「歴史の天使」は、現在における過去を通じて未来を見出す。現在の歴史は、それが現在あるという事実において勝者のものである。しかしその勝者の行進の後に積みあがっていた死物においてこそ、現在を変革させる可能性が見出される。このような歴史哲学が、Benjaminの方法論の中核を貫くものとされる⁽⁶⁾。

だが、内田が指摘するように、「歴史の天使」とは、観察と記述をめぐる形象でもある。それが見つめる廃墟とは、現在の社会と過去の社会を同一のものとして観察するときに現在の枠組みでは見失われてしまう残余である。そして死者を蘇らせる行為とは、この残余の観察を通じて現在とは異なる可能態を記述することである。「歴史の天使」は、連続的な時間性と異なる時間性のありかたと同時に、観察と記述に潜む力を示している。

3.2 記述の遂行性

Andersonの議論における「歴史の天使」の形象の重要性を捉えなければ、そのナショナリズム論の卓越性を十分に理解したとはいえない。

この卓越性は、記述の遂行性performativityに対する強い自覚として理解できる⁽⁷⁾。この点を考察することを通じて、Andersonによるナショ

ナリズムの観察と記述の別の側面を示すことができる。

Andersonは「歴史の天使」の形象を、具体的な人物たちに重ねている。それは、インドネシアの作家Pramoedya Ananta Toerであり、あるいはタイの研究者たちである。

おそらくこの地点においてこそ、ここでとりあげた三人のラディカルな大学人が、プラム〔プラムディヤ〕とピピットに出会うことになるだろう。それぞれ異なるやりかたではあるが、彼らは書く。書きつづけてやまない。それはけっして自分たちの同国人のためだけではない。彼らは後ろ向きに進む天使の足もとにちらばる残骸のなかから、大切に蓄えておくべきものを拾い集めようとしているのだ。近代の過去——その中心部分であった共産主義をも含めて——は、その深みから再審され、審問され、可能な場合には回復されねばならない(Anderson, 1998=2005:298)。

この引用においても、観察と記述という行為が強調されている。過去の観察とその記述は、現在を搖るがすような可能態の保存として理解される。

3.3 記述の時間性

この可能性を考察するためには、「ナショナリズムの再生産」において摘出された連続的な時間性と異なる時間性を追求する必要がある。「ナショナリズムの再生産」において、同一なものが繰り返し生み出されるのに対し、「歴史

観察と記述という点で、「歴史の天使」の形象を、小説家と研究者という異なる立場に適用することも重要である。このようなナショナリズムの小説家とナショナリズムの研究者を併記させることは、『比較の亡靈』において、José Rizalの物語に自らの経験を読み取ったAndersonの所作にも見出せる⁽⁸⁾。

すなわち、Andersonの議論において、「ナショナリズムの再生産」は陥落としてはみなされていない。ナショナリズムにおいて、研究者とその対象となるような小説家は、「ナショナリズムの語り手」という同一平面に立つ。研究者は超越的な立場をとりえず、その語りそのものがナショナリズムの語りという性格を帯びていく。

だが、このことが示すのは、社会科学によるナショナリズムの記述の不可能性ではなく、内部からの観察と記述の可能性である。これは、Benjaminの「歴史の天使」が「遊歩者」の形象と重なることにつながっていく⁽⁹⁾。ナショナリズムの内部から観察し、記述することは、自らの記述にナショナリズムが刻印されることを拒否するものではない。内部に位置することは、ナショナリズムに従属することを意味するのではなく、むしろ徹底した内属を自覚することにおいてナショナリズムの解明の可能性が生じるのである。

の天使」が有する時間性はその同一性がずれていくような時間性である。これは、記述の時間性を捉えることになる。

このような、記述の時間性を考察したのが、Homi Bhabhaである。BhabhaもまたAnderson

と同様に、ベンヤミンの「歴史の天使」の形象に注目している。Bhabhaはさらに、Deridaの議論を援用することでその可能性を理論的に考察している。

Bhabhaが注目するのは、Derridaのエクリチュールの議論がもつ時間性である。記号は引用され現在に蘇るが、それは様々なコンテクストに置き換えられ、その意味内容は固定化されえない。同一のものを反復しながら、それは同一であることを常に裏切っていく。

この機制を、ナショナリズムの語りに援用することで、Bhabhaはナショナリズムにおける分裂を見出していく。「人々」という語は常に社会的参照行為において出現する。「人々」はネーションの歴史を教え込まれる客体であると同時に、ネーションを語り意味を付与していく主体でもある。前者において連続的な過去の時間性から権威を引き出され、後者において常にそれが新たに変容する可能性にさらされるのである。この後者の時間性こそが、記述の時間性

である。

記述の時間性に注目するとき、ネーションはもはや均質な全体とは想定されない。静止状態にあるように見えながら、その内部では、均質な共同体という全体化を目指す力と個別化を目指す力がせめぎあう。記述の時間性は、均質な全体に、分裂の契機を導入し、内なる他性を抱えたものへと書き換えていく⁽¹⁰⁾。この語りの分裂をもたらす、記述の時間性こそが、Benjaminが論じるような別のありえたかもしれない可能性を現出させる。

Bhabhaが提起するポスト・コロニアルという問題構成は、Saidのオリエンタリズム批判から派生した議論のように、見えざる従属関係を批判し、少数者や異種混血性の主体性を強調する議論とは異なる。むしろそれは、全体性や連続性に基づく従来の社会の観察と記述とは異なる、新たな社会の観察と記述の方法を模索するという極めて社会学的な企図に基づいていると考えることができる⁽¹¹⁾。

3.4 Andersonの歴史叙述—Tan MarakaとJosé Rizal

ナショナリズムの内側に属しながら、記述の遂行性において、常にその意味領域をずらしていく。それは、一面においては「ナショナリズムの再生産」のように見える。だが、そのような自らの観察と記述の遂行性を引き受けることなしには、ナショナリズムを理論的に捕捉することも、それとは異なる可能性を模索することもできない。本節の最後において、このような観察と記述を、Andersonの歴史記述に確認する。

Andersonはその長いキャリアをインドネシ

ア研究者として出発し、博士論文において1945年から1946年の日本占領期を中心としたインドネシアの歴史研究を行なっている(Anderson, 1972)。そして、2005年に出版された新しい著作においては、フィールドをフィリピンへと移し、19世紀末、フィリピン独立戦争前後の歴史研究を展開している(Anderson, 2005)。強調すべきは、この二つの研究の類似性である。

Andersonのジャワの革命期の研究は、とりわけ、Tan Marakaという革命家に特徴づけられる。Tan Marakaは1922年に国外追放され、

1942年に帰国するまでの20年近く中国、東南アジアで革命運動を工作した伝説的な人物である。彼は、ジャワの革命期において、青年層の支持を得て、徹底的な社会変革を主張するが、その企図は失敗に終る。

他方、フィリピン独立戦争期の研究では、José Rizalが取り上げられ、『ノリ・メ・タンヘレ』と『エル・フィリップスティリスモ』という二つの小説が、Andersonが初期グローバリゼーションと呼ぶ布置の中で、分析される。José Rizalもまた処刑され、フィリピンは独立後まもなく、アメリカの植民地となる。

この両者の研究において、Andersonは革命期に注目する。革命期とは、様々な可能性が混在し衝突する時間である。ナショナリスト、社会主義者、植民地官僚、現地支配階級などが様々な社会構想を提出し、様々な観察と記述の可能性が出現する。そしてその歴史的調査においてAndersonは、「ありえたかもしれない可能性」をTan MarakaやJosé Rizalといった敗れ去った瓦礫の中から収集しようとするのだ。

このAndersonの企図が明確に示されるのが、

5. 結論—意義と課題

本稿は、従来のナショナリズム研究において理論的陥穂として考えられてきた「ナショナリズムの再生産」に焦点を合わせ、それを観察と記述の問題として理論的に考察してきた。「ナショナリズムの再生産」は、近代における連続的な時間にまつわる観察の様式に由来する一方で、記述がもつ時間はこの連続的な時間を裏切る可能性をもつ。「歴史の天使」という形象は、

『エル・フィリップスティリスモ』に描かれた状況と、革命期のジャワを重ねる記述である。

1945年の終わりごろ、彼の国に対する日本軍の占領が崩壊してからようやく二ヶ月がたち、まだオランダの植民地主義が力をとりもどしていない頃、インドネシアの若き初代首相、Sutan Sjahrirは、革命の端緒について同国人たちの状況をgelisahという語で描いている。この語は容易に翻訳できるものではない。「不安」「震え」「解き放たれ出発する感覚」「期待」といった意味の広がりを想像しなければならない。これは『エル・フィリップスティリスモ〔革命、反逆〕』の感覚である。何かが到来しつつあるのだ（Anderson, 2005:122）

革命の時期とは、可能なるものと不可能なるものを規定する諸条件に変更が加えられる瞬間である。Andersonは、現在の事象を考察し、瓦礫の中からありえたかもしれない可能性を現出するために過去へと向い、「歴史の天使」として振舞うのである。

内在的な観察と遂行的な記述を示すものであり、ナショナリズム研究は自ら観察し記述する行為においてナショナリズムに内属することになる。だが、これは理論的後退ではなく、むしろ内側からの観察においていかに社会を記述していくかという点に、ナショナリズム研究の領野を移動させるものである。

本稿の意義は、ナショナリズム固有の問題と

しての時間に注目し、観察と記述を組み込んだナショナリズムの理論的視座を提起したことにある。またAndersonの時間および歴史哲学をめぐる問題を、「歴史の天使」という形象から再検討し、具体的な歴史叙述においてAndersonのナショナリズム論の新たな意義を提出するものである。

従来のナショナリズム研究は「ナショナリズムの再生産」を理論的陥落とみなし、観察と記述の客觀性を志向することで、ナショナリズムが有する社会との動的な相互作用を解明する道筋を閉ざしてきたといえる。客觀と主觀を明確に二分することが、逆説的にナショナリズム研究に伴う過剰な肯定と否定を招いているのではないだろうか。本稿が提起する「解除」とは、「ナショナリズムの再生産」を理論的陥落として扱わないという選択である。ネーションを観

察し記述することがナショナリズムであり、観察し記述されたネーションを観察し記述する研究者も、ナショナリズムの内側に位置する。問われるのは、この言説への内属から出発し、どのような観察と記述を展開することができるかということである。

本稿が開示する新たなナショナリズム研究とは、Andersonの観察と記述に込められた歴史哲学と方法論を具体的な歴史記述の中で展開していくことである。これは、「想像の共同体」という命題を確認する作業ではなく、Andersonが見た「革命の時期」をナショナリズムの歴史の中から観察、記述する作業となるであろう。すなわち、ナショナリズムの理論的、歴史的展開を追跡する作業ではなく、各々のナショナリズムの失敗する地点を見定め、そこから様々な可能態を探求する作業になるであろう。

註

- (1) ナショナリズムを言説として捉えることを、Calhounは次のように説明する。「ネーションは経験的な測定によつては効果的に定義することは不可能である。つまり、実際にそのネーションが主権性を獲得しているかどうか、内的分裂に対して自らを守ることによって統合を維持しているかどうか、厳密な境界線を持っているか、あるいはその文化が完璧に統合されているか、特別に古いか、といった測定による定義では不可能なのだ。ネーションとは、むしろ、その主張それ自身によって、また集合的アイデンティティを生み出し、集合的な企図へと人々を動員し、その人々や実践を評価するような主張に依存して話すこと、考えること、行動することの様式によって、大いに構成されるのである」(Calhoun, 1997:5)。
なお、日本の社会学における「言説」概念の導入に関しては、その可能性を検討した内田（1980）、近代化という大きな物語との関連で論じた佐藤（1998）、その通俗化に対する強烈な批判とともにフーコーの可能性を再審する遠藤（2000）を参照。
- (2) Giddensは近代の制度の特徴として、《時間と空間の分離》、《脱埋め込みメカニズムの発達》、《知識の再帰的占有》を挙げているが、このいずれもが時間という問題と関わっている。《時間と空間の分離》において、「時間の空間化」が「空間の空白化」に先行するとされている (Giddens, 1990=1993:32)
- (3) 時間の概念は、「ナショナリズムの再生産」の機制を考察するうえでも、また言説としてナショナリズムを捉えていくうえでも、必須のものである。そもそも、Foucaultが系譜学を論じ、Derridaのエクリチュールの概念が常に時間性の問題であるように、言説の概念は、時間の問題と切り離すことができない (Foucault, 1971=1999、高橋, 1998)。

- (4) 宗教とナショナリズムの近似は多くの論者が指摘するところである (Anderson, 1983=1997、Smith, 2003=2007)。死者、まだ生まれざる者についての考察は、Anderson (1998=2005) を参照。ナショナリズム研究における近代主義的アプローチや構築主義的アプローチに対する批判が問題とするのは、これらのアプローチが死や愛着といった問題について十分に説明しないことである。
- (5) この点に注目している議論として、中山 (2002a; 2002b) がある。中山もまた、Andersonの中核にBenjaminを見出すというプロジェクトに着手している。「社会や歴史を全体性で把握しようとするときに、進歩の概念の一面化がおこる」。そして、Benjaminが「今のとき」に託したアクチュアリゼーションの手法は、「『均質で空虚な時間』を通じた歴史や人類の単線的・一方向的な前進を疑う場合にのみ可能である」(中山, 2002b:233)
- (6) 今村 (1990; 1995; 2000)、小林 (1991)、道旗 (1992)、石光 (1995)、三島 (1998)、Jay (1998=2001) などを参照。「歴史の天使」とは、「あらゆる《歴史観》の破壊であるような《歴史観》、あらゆる《歴史観》から過去を救出し、《現在時》へと解放するような《歴史観》である」(小林, 1991:215)。このような歴史記述は、従来の歴史記述がもつ「過去と現在の滑らかな連続性を想定しており、またいわゆる客観的なストーリーから天上の神々のように距離をとる」のに対し、「『破壊的性格』の偽装を身にまとう」(Jay, 1998=2001:13)。これは、「そもそもの出来事の連続的な時間的進行」ではなく、「この連続が断ち切られたあとに残る、死んで孤立した個々の出来事の空間的、断続的な並列」である。そこで求められるのは、「連続性を失った歴史の諸断片が送ってくる意味を、確たるコードをもたぬまま解読し、現在忘却されている『原史』での生のありようを、過去についての一回きりの経験として一瞬蘇らせる」ことである (道旗, 1992)。ここにおいても、解読—観察と蘇生—記述という点が問題となっている。
- (7) 遂行性performativityの概念については、Derrida (1990=2002), Butler (1993; 1997=2004) を参照。
- (8) 「比較の亡靈」という経験は、Andersonがスカルノ大統領の演説（ヒットラーをナショナリストの一人として語るものだった）を聞いたときの眩暈の経験が、Rizalの小説の主人公がマニラの植物園を見たときに襲われるベルリンの植物園の想起に重ねられたものである (Anderson, 1998=2005:1-4)
- (9) 「歴史の天使」と「遊歩者」の相同性については、Ardentを参照。このような観察者が対象に内属しながら記述するという可能性において、Andersonのナショナリズムの観察と記述についての方法論は、内田 (2005) が社会学の記述の可能性としてBenjaminの「遊歩者」の形象を分析したものに接合可能であろう。また、内田 (2001a) も参照。
- (10) これはDerridaの「代補」を援用するものである。代補とは、「外から（あるいは後から）偶然的な捕捉物として本体に付加されるものが、本体の内奥に侵入し、そこに棲みつき、それにとって代わってしまうという運動」(高橋, 1998:86) である。
- (11) Bhabhaがいう「ポストコロニアル」の視点とは、「社会現象を全体論的に説明しようとする試みに抵抗する」ものとして位置づける。そして、「新しい諸歴史を記述することができるよう、社会的時間性を根底から修正すること」、「『記号』を組み替えること」を目指している (Bhabha, 1994=2005:290-2)。なお、Bhabha(1990)も参照

参考文献

- Anderson, Benedict, [1972] 2006, *Java in a Time of Revolution: Occupation and Resistance, 1944-1946*. Ithaca: Cornell University Press.
- , [1983] 1991, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, London: Verso.
 (=1997, 白石さや・白石隆訳『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』NTT出版.)
- , 1990, *Language and Power: Exploring Political Culture in Indonesia*, Ithaca: Cornell University. (=1995, 中島成久訳『言葉と権力——インドネシアの政治文化探求』日本エディタースクール出版部.)
- , 1998, *The Spectre of Comparisons: Nationalism, Southeast Asia, and the World*, London: Verso. (=2005, 糧

- 谷啓介・高地薰他訳『比較の亡靈——ナショナリズム・東南アジア・世界』作品社.)
 ———, 2005, *Under Three Flags : Anarchism and the Anti-colonial Imagination*, London: Verso.
- Ardent, Hannah, 1968, *Men in Dark Times*, New York: Harcourt, Brace & World. (=2005, 阿部齊『暗い時代の人々』筑摩書房.)
- Balibar, Etienne and Wallerstein, Immanuel Maurice, 1990, *Race, nation, classe : Les identites ambiguës*, Paris: La Decouverte. (=1995, 若松章孝他訳『人種・国家・階級——揺らぐアイデンティティ』, 大村書店.)
- Benjamin, Walter, 1940, "Über den Begriff der Geschichte" (=1995, 浅井健二郎編訳・久保哲司訳「歴史の概念について」『ベンヤミン・コレクション I — 近代の意味』ちくま学芸文庫.)
- Bhabha, Homi, 1990, "Introduction: narrating the nation," Bhabha, Homi eds., *Nation and Narration*, New York: Routledge, 1-7.
- , 1994, *The Location of Culture*, London: Routledge (=2005, 本橋哲也・正木恒夫・外岡尚美・阪元留美訳『文化の場所——ポストコロニアリズムの位相』法政大学出版局.)
- Bhabha, Homi eds., 1990, *Nation and Narration*, New York: Routledge.
- Brubaker, Rogers, 1996, *Nationalism Reframed : Nationhood and the national question in the New Europe*, Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- Butler, Judith, 1993, *Bodies that Matter: On the Discursive Limits of "Sex"*, New York: Routledge.
- , 1997, *Excitable Speech: A Politics of the Performative*, New York: Routledge. (=2004, 竹村和子訳『触発する言葉——言語・権力・行為体』岩波書店.)
- Calhoun, Craig, 1997, *Nationalism*, Buckingham: Open University Press.
- Derrida, Jacque, 1990, *Limited Inc*, Paris: Galilée. (=2002, 高橋哲哉・増田一夫・宮崎裕助訳『有限責任会社』法政大学出版会.)
- 遠藤知巳, 2000, 「言説分析とその困難——全体性／全域性の現在的位相をめぐって」『理論と方法』15 (1) : 49-60.
- Gellner, Ernest, 1983, *Nations and Nationalism*, Oxford: Blackwell Publishers. (=2000, 加藤節訳『民族とナショナリズム』岩波書店.)
- Giddens, Anthony, 1990, *The Consequence of Modernity*, Cambridge, UK: Polity Press. (=1993, 松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か? — モダニティの帰結』而立書房.)
- Habermas, Jurgen, 1985, *Der philosophische Diskurs der Moderne*, Frankfurt am Main : Suhrkamp. (=1990, 三島憲一・轡田収・木前利秋・大貫妙子訳『近代の哲学的ディスクルス (I・II)』岩波書店.)
- Hobsbawm, Eric, 1990, *Nations and Nationalism since 1780*, Cambridge: Cambridge University Press. (=2001, 浜林正夫・嶋田耕也・庄治信訳『ナショナリズムの歴史と現在』大月書店.)
- 今村仁司, 1990, 『作ると考える — 受容的理性に向けて』講談社現代新書.
- , 1995, 『ベンヤミンの〈問い合わせ〉 — 「目覚め」の歴史学』講談社新書メチエ.
- , 2000, 『ベンヤミン「歴史哲学テーゼ」精読』岩波書店.
- 石光泰夫, 1995, 『身体 — 光と闇』未来社.
- 小林康夫, 1991, 『起源と根源 — カフカ・ベンヤミン・ハイデガー』未来社.
- Jay, Martin, 1998, "Walter Benjamin, Remembrance, and the First World War" (=2001, 谷徹訳「ベンヤミン、記憶、第一次世界大戦」『思想』929: 4-31.)
- 三島憲一, 1998, 『ベンヤミン』講談社.
- 道嶺泰三, 1992, 「ボロとクズの弁証法」『現代思想』vol.20-13: 1-62.
- 中山智香子, 2002a, 「歴史の中の複製技術【新しい天使から比較の亡靈へ】」『社会思想史研究』26: 12-19.
- , 2002b, 「天使の顔：大戦間期の複製技術と総動員」『クヴァドランテ四分儀』4: 217-235.
- 小熊英二, 2002, 『〈民主〉と〈愛国〉 — 戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社.
- Özkirimli, Umut, 2000, *Theories of Nationalism: A Critical Introduction*, Basingstoke: Macmillan.
- 佐藤俊樹, 1998, 「近代を語る視線と文体」高坂健次・厚東洋輔編『講座社会学1 理論と方法』東京大学出版会, 65-

- Smith, A. D., 1991, *National Identity*, Reno : University of Nevada Press. (=1998, 高柳先男訳『ナショナリズムの生命力』晶文社.)
- , 2003, *Chosen Peoples : Sacred Sources of National Identity*, Oxford University Press (=2007, 一条都子訳『選ばれた民：ナショナル・アイデンティティ、宗教、歴史』青木書店.)
- 高橋哲哉, 1998, 『デリグ』講談社.
- 内田隆三, 1980, 「〈構造主義〉以後の社会学的課題」『思想』676 (10) : 48-70.
- , 2001a, 『探偵小説の社会学』岩波書店.
- , 2001b, 「二十世紀の像を求めて」山脇直司・内田隆三・森政稔・米谷匡史編『ネイションの軌跡——20世紀を考える (1)』新世社, 1-6.
- , 2005, 『社会学を学ぶ』ちくま新書.
- ヨネヤマリサ, 1998, 「記憶の未来化について」高橋哲哉・小守陽一編『ナショナル・ヒストリーを超えて』東京大学出版会, 231-248.
- , 2003, 『暴力・戦争・リドレス：多文化主義のポリティクス』岩波書店.
- , 2005, 『広島：記憶のポリティクス』岩波書店.
- 吉野耕作, 1997, 『文化ナショナリズムの社会学——現代日本のアイデンティティの行方』名古屋大学出版会.



新倉貴仁 (にいくら たかひと)

1978年8月8日生まれ。東京大学学際情報学府修士課程修了

[専攻領域] 社会学、ナショナリズム研究

[著書・論文]

「ネーションとステートの亡霊的関係」『現代思想』2007年1月

[所属] 東京大学学際情報学府博士課程

[所属学会] 日本社会学会、関東社会学会、マス・コミュニケーション学会

The Reproduction of Nationalism: The Angel of History in Benedict Anderson's Work

Takahito Niikura

Studies of nationalism often pre-frame a phenomenon using the concept of nationalism itself, and in doing so reproduce national narratives. I call this "the reproduction of nationalism". Previous research has considered it as a pitfall in the theory of nationalism. My research, however, reformulates this difficulty as a vantage point from which the theory of nationalism can be reconstituted.

Initially, I will delineate reasons behind "the reproduction of nationalism" as put forth in previous work on nationalism. It reveals that "the reproduction of nationalism" is the problem of observation and description. Most studies have been perplexed with the definition of nationalism itself. To avoid this difficulty, some researchers attempt to treat nationalism as a 'discursive formation', to signify that people throughout the world frame their reality in terms of nationalism. Yet this formulation of nationalism as a discourse leads to the degradation of nationalism as a theoretical object. If nationalism is constructed through narration, it becomes no different from any other social phenomena. To treat nationalism as a social construction cannot explain its vast influence. To avoid this degradation I focus on temporality as the inherent domain of nationalism. This follows Benedict Anderson's argument that "the reproduction of nationalism" is closely connected with continuous temporality. From this standpoint of temporality I would like to consider the significance of "the angel of history," originally used by Walter Benjamin and cited by Anderson. I rethink this figure focusing on the aspect of observation and description and formulate the temporality of description through the examination of Bhabha's analysis of the narration of nationalism. In addition, I examine Anderson's historical studies of Indonesia and the Philippine as an exemplar of observation and description.

The contribution of this paper consists of two points. First of all, this paper will provide a new perspective for studies on nationalism by embedding observation and description into

Graduate school of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo

Key Words : the reproduction of nationalism, the discourse of nationalism, the angel of history, temporality

the theory of nationalism. This will help us to avoid the difficulties of "the reproduction of nationalism." This paper will also clarify Benedict Anderson's philosophy of history, which has rarely been studied.